

まちづくり情報誌 ちもんけん

Vol.113 ～まちづくりで孤独・孤立を解消～「社会的処方とは」



目次

- P2 特集～まちづくりで孤独・孤立を解消～
「社会的処方とは」
INTERVIEW 医師 西 智弘さん
- P6 1テーマ レポート&エッセイ
「テーマ:社会的処方とは」
- P9 公民連携セミナー開催報告
- P10 市町村ゼミナール開催報告
- P12 所員紹介

～まちづくりで孤独や孤立を解消～『社会的処方とは』



chimonken

INTERVIEW

医師 西 智弘さん



「社会的処方」をご存知ですか？ それは、これまで私たちが進めてきた様々なまちづくりの取組を、今一度見直すヒントではないでしょうか。

医療行為ではなく「社会のつながり」で患者を支える「社会的処方」を実践されている西智弘さんにお話をうかがいました。

社会的処方って？

西さん(以下敬称略)

薬を処方することで患者さんの問題を解決するのではなく、『地域とのつながり』を処方することで問題を解決するというもの。例えば、うつ病を抱えている患者さんを地域

の趣味のサークル活動とつなぐなど、心身の不調を治療する際に医療行為で対処するのではなく、地域資源を通して生活環境を変えて困りごとを解決するのが「社会的処方」のアプローチです。

まちづくりは、地域課題を解決することに着目しがち。 「地域は課題の塊ではなく、可能性の塊だ」という視点をもつには？

西 地域課題を見つけ出すことも大事だが、放置したら命に関わるような緊急性の高いものは、社会的処方では対処できないので、行政や医療機関などで専門的に速やかに対応すべき。まちの中での孤立・孤独や不登校など、もっと長期で取り組む課題は、社会的処方で対応し、可能であれば楽しんで解決したいですね。

西 そうです。そして「困っている人に手を差し伸べた、地域のために何かをやってあげた」という立場は気持ちが良かったりします。まちの中で暮らしている一人ひとは、なんらかの特技や能力、魅力や特性、つまり凸凹の「凸」を持っているはずだと僕は考えます。弱い属性である「凹」は見つけやすいが、「凸」は本人でさえも見つけられなかったり、信じられなかったりする。他者の立場で信じて待つことはなかなか難しいのです。

ちもんけん(以下 ち) どうしても、わたしは「助ける人」、あなたは「助けられる人」という構図になってしまいがちです。

一人ひとりが持つ「宝」や「面白さ」を見つけるには、どうしたら良いのでしょうか

西 まちの人たちは、地域のために何かやりたい、あるいは何かできるという思いを結構持っています。年をとっても、障害をもっている、それでもやりたいことやできることがある。それを「やりたい」と手を挙げやすく、「見える化」していくのはとても大事。オリパラを契機に川崎市で開催した

「あなたの何かを、くす玉で応援したい」と手を挙げた。オリパラを契機にその能力が知られることとなり、その後の活動にも繋がっています。「こういうことをやりたい」と聞いた時に「あの人となら、あの場所なら、できるかも知れない」とまちのあちこちにいるリンクワーカー的な人がつなげる文化を持ちたいものです。

「勝手におもてなし大作戦!※」では、普段はサラリーマンをしている人が、実はコーヒ一通で、道端でコーヒを入れておもてなししたいとか、くす玉を作るのが得意な人が、



※東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を契機に障害のあるなしや年齢や人種の違いに関わらず、すべての人が活躍できる社会の構築を目指す「かわさきパラムーブメント」が推進され、自分の趣味や特技、アイデアなどを活かして、川崎に暮らす方々に向けて、自分が楽しくて、ドキドキする「おもてなし」をふるまってみるという取組

【略歴】西 智弘(にし・ともひろ)

一般社団法人プラスケア代表理事／川崎市立井田病院かわさき総合ケアセンター腫瘍内科／緩和ケア内科医師／日本臨床腫瘍内科学会がん薬物療法専門医。

2005年北海道大学卒。家庭医療を中心に初期研修後、総合内科／緩和ケアを研修。2009年から栃木県立がんセンターにて腫瘍内科を研修。2012年より現職。現在は抗がん剤治療を中心に、緩和ケアチームや在宅診療にも関わる。一般社団法人プラスケアを2017年に立ち上げ代表理事に就任。「暮らしの保健室」や「社会的処方研究所」の運営を中心に、「病気になっても安心して暮らせるまち」をつくるために活動。

著書に『社会的処方(学芸出版社)』『だから、もう眠らせてほしい(晶文社)』など



参加する「隙」のある、まちづくり

ち 行政や町内会は、「やりたいこと」や「面白いこと」から始めることを許容しきれず、目の前で困っているお年寄りを助けよう、と課題解決を急いでしまいがちです。それ自体は悪いことではありませんが、地域課題を意識しながらも、もっと楽しくやるにはどうしたらよいのでしょうか。

西 よくある行政の進め方は、クレームを避けるため、一分の隙もないように準備を整えてからサービスを提供しようとする事です。しかし、しつらえが完璧だと利用者はお客さんのままで、仲間になれないし居場所ができない。望ましいのは、もっと虫食いの状態でリーダーも完ぺきな人ではなく、やや頼りないお兄さんでスタートすること。参加した人が、その虫食いや頼りない部分を「しょうがないな、一緒にやってあげるよ」と何らかの役割を担うほうが、理想的だと思います。参加意識が生まれ、自分はコミュニティの一員なのだと実感できる。それはまちづくりでも同じで、まちを良くしていくために、自分の力が役立つんだとか、こういう表現を担っていると感じられる、それが許される状況が良いのではないのでしょうか。

ち 参加したり役割を担ったりできる「隙」のあるまちで、「やりたい、楽しい」をした結果、課題解決にもつながることになるんですね。

西 こんな例もありました。プロのクリエイターと小中学生がものづくりに取り組む「クリエイティブガレージ」という場に不登校の子がやってきた。何回か通って来て、ゲームと一緒にやるうちに、少しずつ周囲とのコミュニケーションが取れるようになってきた。何年か続けるうち、自分がやりたいことを表現できるようになり、後からやってきたゲーム初心者には先輩としての確に教えたり、リーダーシップを発揮したりできるようになったそうです。そこで能力を発揮し自信を取り戻したことにより、不登校も解決しました。その子にしてみたら、教室の方針を押し付けられたり、ゲーム教室のリーダーをやれなどと命令されたりしたのではなく、やりたい、やってみたいと表現していたら、結果として課題解決につながったのです。(次ページへ)



データでみる「日本の孤独・孤立」



一人暮らし世帯割合

全国

名古屋市

38.1% 45.3%

(2020年 令和2年国勢調査)

「自分は孤独だ」と感じる15歳の子供の割合

29.8%

24か国中ダントツトップ

(ユニセフ子供の幸福度調査 2007)



家族以外の人との交流がないひとの割合

15.3%

OECD加盟国20か国中トップ

(OECD Society at a Glance 2005)



外出頻度別孤独感

孤独感が「しばしばある・常にある」

14.5%

外出しない



3.0%

週3〜4日外出する

(人々のつながりに関する基礎調査(令和3年))

社会的処方場づくり

ち 認知症カフェなど、暮らしに寄り添う地域の保健室のような場を、医療従事者ではない人が立ち上げる時は、どのような視点があると良いのでしょうか。

西 例えば「認知症カフェ」と看板を出すと、課題ありきで、かえって人が集まりにくくなることもある。認知症について話したい人は当事者よりもケアラーが多い。がんの患者会は、がんの当事者が話す場としてニーズはありますが、その人たちも、がんの話ばかりしたいわけではなく、お酒やサーフィンをキーに集まりたいなんてこともある。出かけていく様々な選択肢の一つとしてそれがあると良いのではないか。かつて「注文を間違えるレストラン」というのが好

事例として注目を集めました。一方で、「認知症だから失敗しても寛容になろう」ではなく、どうしたらスムーズにやれるか改良を重ねていくべきではないか、という意見もあります。確かに作業を分解し、間違いが生じないようにサポートするという方法もありますが、僕は、スタッフのおばあちゃんが認知症であろうがなかろうが関係なく、この人に会いたい、この人から買いたいと思うから来店するというのが良いと思います。例えば、囲炉裏ばたで、昔話をしながらお餅を焼いてくれるのが楽しみで、そのおばあちゃんの存在が、その店のコンセプトになっているとかです。

まちづくりに社会的処方を取り入れる時は

ち リンクワーカーを軸に社会的処方が機能しているイギリスと、日本は何が違うのでしょうか

西 イギリスでは、社会的処方を、行政ではなく民間組織が始めています。イギリスは移民問題や貧富の差など、分断が日本に比べて深刻に存在し、それを行政に頼らずなんとかしなければならぬと市民が動きました。移民に言葉を教える人、病院や仕事に行く人の子どもを預かる人など、自発的に行動する人がいて、徐々に社会的処方というシステムができあがっていったのです。資金面は、チャリティ文化が支えています。日本は国が旗を振って始まったところですが、これまでも海外の良いものを市民活動よりも先に国が整えた結果、失敗した例はたくさんあります。社会的処方がそうなるのは避けたい。

ち 書籍「社会的処方」の中でも、日本では「みんながリンクワーカー」にしようと呼び掛けておられますね。

西 日本には、近所のおせっかいおばさんや地域の顔役おじさんが存在します。リンクワーカーという「制度」ではなく、できる人ができる範囲で地域の「お宝」や面白いものをつなぐような、「文化」とするほうが実現性は高いと感じています。

ち 社会的処方的な考えをまちづくりにとり入れていく上で、行政や自治体職員のみなさんは、どんなことに留意すべきでしょうか。

西 行政にとり入れるとしたら、やはり複数の課をまたぐ統轄部署が必要です。何十年も経って、日本の文化へと定着するまで、横串を指してくれるような。国は2021年に孤

独・孤立担当大臣を置き、内閣府の中に担当室を作りました。なぜ内閣府なのかと聞いたら、厚労省に置くと厚労省の範囲で完結してしまう。し

かし社会的処方は、文科省や経産省、財務相など全てに関わってくる。各省庁に広げ、それを統轄するために内閣府に置いたとのこと。自治体においても担当者が数年で変わってしまうので、人に属するのではなく組織で統括することが大事だと感じています。

また、自治体職員が個人レベルで町の中に仲間として入っていくのはハードルが高い。ましてや1~2年でそれを成し遂げるのは無理がある。仲間としてやっていくためには、町の中で行政がどう役割を果たせるのかをよく考えた上で、皆さんが課題に感じていることはなんですか？ 私たちに何ができますか？と皆さんがやりたいこと、解決したいことを後押ししたいです、という姿勢で入っていくべきだと思います。行政がやりたいことを前面に出して、町の人に着いてきてくださいというのはいく行かない。どうすれば、人の心に火をつけ、それを盛り上げられるかを意識してほしい。

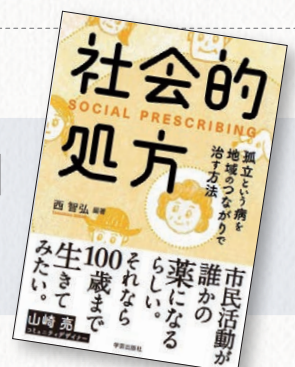
ち 行政のリーダーシップのあり方も変容しているということですね。「社会的処方」について、少しわかってきたように思います。大変興味深いお話を、本当にありがとうございました。



書籍紹介 『社会的処方 孤立という病を地域のつながりで治す方法』

西智弘編著、2020年、学芸出版社

社会的処方研究所&暮らしの保健室SHOP <https://pluscare.thebase.in/>



「孤独・孤立」への先進的取組 イギリス



「孤独・孤立」への取組はイギリスが先進的で、「リンクワーカー」が患者の生活や興味についてヒアリングし、釣りや編み物サークルなどの地域資源とつなぐ。2017年に行われた政府主導の調査では、人口の13%超が孤独を抱え、経済損失が年間4.7兆円と試算された。2018年には孤独担当大臣が新設され、各省・民間との連携のもと、カフェや文化的な拠点等の居場所がつくられている。

日本における取組



日本では2021年に孤独・孤立対策担当相および「孤独・孤立対策担当室」が新設された。2022年2月には、孤独・孤立を感じている人を支援するため、民間団体とつくる「官民連携プラットフォーム」の設立総会が開かれた。また2万人を対象とした「人々のつながりに関する基礎調査」の調査結果が2022年4月に発表された。

(インタビューを終えて…)

コロナ禍で日常的なコミュニケーションが希薄になり、人との気軽なつながりが自発的に生まれにくい状況だからこそ、改めてゆるやかにつながりを生みだしていく社会的処方取組が必要であることを感じました。ただし、はじめから「つながりを作ること」をゴールとして意識しすぎると、ワクワク感が損なわれて形だけのものになってしまいかねません。むしろ、もともと地域にある様々な地域資源、社会資源の魅力や価値を社会的処方の視点から再評価し、新たなライフスタイルに応じてリノベーション(手直し)することで、若い世代や新しい住民にも受け入れやすい仕組みやきっかけが生まれるのではないのでしょうか。

…1時間半におよぶインタビューの中から、紙面でご紹介できたのはほんの一部です。

インタビュー記録全文は、地域問題研究所のホームページをご覧ください。



【ちもんけんが各地で育んできた、社会的処方の“たね”いろいろ】

認知症 フレンドリーコミュニティづくり

「認知症の人が、高い意欲を持ち、自信を持って、意義のある活動に参加、貢献できると感じられるようなコミュニティ」と定義される認知症フレンドリーコミュニティ。地域住民や学生、事業所、福祉・行政関係者などが、認知症当事者とともに時間を共有しながら相互理解を深めるとともに、将来ビジョンづくりやツアーなどの自主事業を実践している。そうした活動を通じてつながりを広げながら、誰もが自分らしく暮らし続けられるコミュニティづくりを進めている。

(名古屋市北区)



シニアの居場所となる 「老人クラブ」の活性化

シニアの交流や地域貢献活動など、様々な役割を果たしている「老人クラブ」は、一方でシニア向けの趣味活動や交流機会の多様化、定年延長などにより会員減少が進んでいる。そこで、老人クラブの魅力や役割を見直し、新たなシニアの参加を促すために、シニアの生きがいづくりや社会参加、地域の居場所としての老人クラブの機能や存在意義を見直している。それらを推進するためのリーダー育成などを支援している。

(名古屋市、知多市など)

多文化共生社会の推進

愛知県は外国籍市民の割合が高く、近年は国籍も多様化している。様々な障壁によってマイノリティとして疎外されがちな外国籍市民が、地域コミュニティの一員として認知され、地域づくりに参画できる、多様性のあるボーダーレスな地域社会づくりが求められる。そこで、外国籍市民向けのアンケート調査やワークショップ、フィールドワークなどの対話を積み重ねるとともに、当事者とともに多文化共生を進めるための戦略の策定及び実践活動を支援している。

(安城市、名古屋市、豊田市、岩倉市など)

コロナ禍における 女性の実態調査と支援方策提案

新型コロナウイルス感染症拡大は、特に非正規職、女性が大きく影響を受けたといわれている。そこで、R3年8月に名古屋市在住の20～59歳の女性を対象とした調査を実施。コロナ禍において女性の生活と就労の変化を明らかにした。その中で、非正規職で子どもを持たないシングル女性に注目し、コロナの影響や、具体的な支援方策などを提案している。

(名古屋市)



1 テーマレポート & エッセイ 「テーマ：社会的処方とは」



若者と高齢者の新たな住まい方の可能性「京都ソリデール」

研究員 藤本 慎介

書籍「社会的処方」にも事例として紹介されている、「京都ソリデール事業」での経験をお話します。京都ソリデール事業とは、京都府住宅課が取り組む「異世代ホームシェア」プロジェクトです。京都府内の大学等に通う学生が、府内に在住する高齢者宅の空き室を間借りし、同居生活を行う下宿のようなものです。この事業では、学生と高齢者のゆるやかな交流により新たな関係性を生み出すこと等が目的となっており、民間の事業者が「マッチング事業者」として両者の間に入り、同居前後の生活をサポートする仕組みがあります。

私は、学生時代に、この仕組みを利用し、2019年から約2年間、60代夫妻（夫：Aさん、妻：Bさん）と、その母親である90歳女性（Cさん）の家で同居生活を体験しました。

Cさんは認知症（要介護5）で、同居8か月後に亡くなられ

ました。同居人が亡くなるという経験は人生で初めてでしたが、日常会話の中で介護の状況や、Cさんの様子をA・Bさんから聞いており、病院と家の往復でバタバタしている時の留守番や、お葬式の手伝い等を気軽に頼んでいただける関係になっていました。

また、緊急事態宣言下では、大学に行けず友人や家族にも会えなかったのですが、同居人とご飯を一緒に食べ、居間でお茶を飲む時間があったことで、孤独・孤立感はほとんどありませんでした。

若者と高齢者が共住する住まい方は、高齢者だけでなく、若者の孤立も解消する可能性があります。東海地域でも、大学や専門学校がある市町村で、「異世代ホームシェア」を検討してみたいはかがでしょうか。



お世話になりました！

にぎやかな食卓



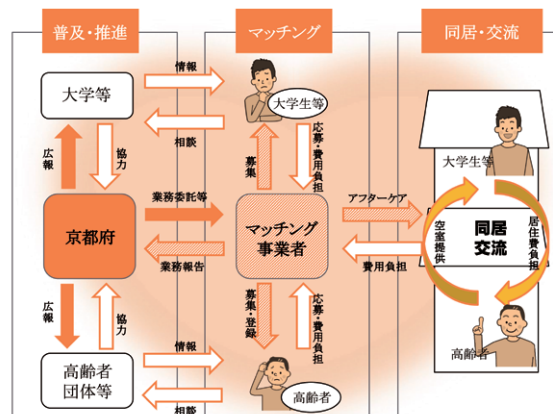
次世代下宿「京都ソリデール」事業概要

- 2015年度 国内外の先行事例調査
- 2016年度 京都市内で事業開始（マッチング事業者へ業務委託（公募型プロポーザル方式）、京都の地域メディアを使った広報や公民館や大学での説明会において、シニアのオーナー、大学生の借り手双方の希望者を募集）
- 2017年度 北部、南部地域へ対象地域を拡大
- 2018年度 中部地域へ拡大
- 2022年3月末現在、大学生等57名がマッチング成立。



（出典：京都府HP）

事業実施体制スキーム図



社会的処方の窓口はここにあった「名古屋市志段味図書館」

囑託研究員 西村 郁

名古屋市守山区にある市図書館の分館で、2004年開館、2013年から指定管理者制度導入により、株式会社図書館流通センターが運営を担当。建物の規模や蔵書数は極めて普通ですが、普通ではないのが多種多様な企画や展示。ホームページの行事一覧には、図書館には関係のなさそうな企画がずらりと並びます。宅地開発が進む志段味地区は転入者が多く、新しい土地での情報や居場所を求めて、多くの人が図書館を訪れます。その中の一人で図書館のおはなし会の常連となった女性が、スタッフや館長と会話をするようになりました。聞けば、他県に住んでいた頃、産後

うつになりかけた経験を持ち、図書館での時間が助けになったとのこと。そして彼女がヨガ講師の資格を持つことを知った館長は、「それなら、今度は助ける側として、ここで、産前産後の女性にヨガを教えませんか?」と提案しました。そうして開催されるようになったのが「マタニティヨガ教室」です。志段味図書館は、来訪者のふと漏らした想いを拾い上げ、意見交換し、企画や館内展示として提供する、いわばリンクワーカーとなっているのです。(弊所主催の市町村ゼミナール9月講座は志段味図書館長の藤坂さんを講師に、取組についてお話しいただきます)

ずらり!と並ぶイベントちらし 常時20以上の企画が進められています。



書籍紹介

「未来をつくる言葉」ドミニク・チェン著

「それでもなお共に在る」未来へ

研究員 林 桃子

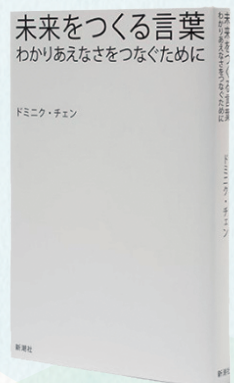
情報学者であり、アーティストでもあるドミニク・チェン氏の著書「未来をつくる言葉」では、「コミュニケーションとは、わかりあうためのものではなく、わかりあえなさを互いに受け止め、それでもなお共に在ることを受け容れるための技法」として、分断を超えるということでも難しいテーマについて、自伝的なあたたかなアプローチで語られています。

すでに存在するカテゴリに当てはめて理解しようとする誘惑をグッと堪え、じっと耳を傾け眼差しを向けることというのは、社会的処方の中で重要視されている「固定概念を捨てて、信じて向き合うこと」に共通する点でもあります。

情報技術によって分かり合えるもの同士の接続が加速すればするほど、わかりあえないものとの分断が拡大していく時代の中で、多様な人が「共に在る」場をつくっていくために、煌めくようなヒントがたくさん詰まった、やわらかな未来への手引きとなる一冊です。

未来をつくる言葉
わかりあえなさをなくために

ドミニク・チェン



ご紹介します

会議やセミナーの議論を可視化する技術 中嶋伸恵さん(合同会社おでかけカンパニー)

調査研究部長 河北 裕喜

創立50周年記念フォーラム(前号参照)をはじめ、当研究所が会議やワークショップで“グラフィックレコーディング”をお願いする中嶋伸恵さん。

絵を描くことが好きだった中嶋さんは、大学で景観工学を学び、大手建設コンサルタントに11年間勤務されました。報告書や会議の議事録の作成の仕事が多いなか、分かりやすく伝わりやすい表現を模索する過程でグラフィックレコーディングに出会いました。

起業後、新たな仕事と並行して、グラフィックレコーディングの腕を磨きました。文字情報のビジュアル化や議論経過の編集により、言葉が飛び交う空間を‘ほのぼのかつ一目瞭然’の成果物として完成させます。



「もう少しビジュアルを使ってコミュニケーションできると、もっと意思疎通がしやすくなると思うんです。自分が好きなこと・できることでお客さんが喜んでくれると、この仕事をやっていて良かったと感じます。」

いつも笑顔の中嶋さんの視界には、プロセスを大事にしながらも分かりやすく表現することへのこだわりと、ビジュアルコミュニケーションへの展開を捉えているように感じました。



コロナ禍における女性の生活・就労の実態調査より

「独身女性の孤独・孤立」

主任研究員 安間 奈巳

新型コロナウイルス感染症拡大に伴う女性の生活と就労の実態調査を、まだまだ感染拡大が続く令和3年7～8月に実施しました。

コロナ禍で「孤独を感じた」人は16%、20歳代では4人に1人であり、若い世代ほど高い傾向がみられました。

今回の調査では、非正規職で子どもを持たない、シングル女性に着目して分析を行いました。彼女たちは、「孤独を感じた」のは20%とやや高く、今後の希望では「結婚したい」32%「人間関係を豊かにしたい」22%と女性全体よりも高く、人とのつながりを求めていることがわかりました。

非正規職で子どもを持たない、シングルの女性のうち、コロナ禍で大きく影響を受けた人の中には、支援が子育て世帯を対象とするものが多く、「自分たちは見捨てられている」と疎外感、絶望感のようなものを感じている方もいました。男性も、女性もしんどくても頑張っている人たちが安心できる取り組みが求められていると感じています。



地域と子育て家庭をつなげる「ホームスタート」とは

事業部長 池田 哲也

みなさんは「ホームスタート」をご存じですか?「外出しづらい」「頼れる人が身近にいない」といったお悩みを抱えた未就学のお子さんがある家庭に、研修を受けた地域の子育て経験者(ホームビジター)が訪問し、友人のように寄り添いながら親子と共に過ごすことで子育て家庭を支えるという取組です。「サービスを提供」する公的な子育て支援とは異なり、時には家事を一緒に行ったり、子どもと一緒に公園に外出するなど、孤立しがちな母子と地域社会との「つながり」を大切にする点は、まさに社会的処方の取組であるといえます。当研究所でも、愛知県内の子育て支援団体と連携し、ホームスタートの普及と子育て支援の充実に取り組んでまいります。



(写真提供:ホームスタート スマイリー・たけと)

民間の技術やサービスを活用した
地域課題解決を推進する

公民連携セミナー

令和3年度公民連携セミナー開催報告

地域の課題は多様化・複雑化している一方、行政の財源・マンパワーには限界があり、これまでの手法だけでは、多様化・複雑化する課題に対応できなくなっているのに対し、新たな技術やアプリ等の開発が進み、こうした技術を活用して地域課題を解決する可能性が広がっています。

そこで、地域課題の解決に寄与し公共サービスを向上し新たなシステムを紹介する「サービス概要集」の作成と、企業からサービスをプレゼンするセミナーを2回開催しました。

◇サービス概要集

- ・19社30のサービスについて、サービスの特徴、サービスの概要、導入事例、連絡先を記載した概要集を作成して、会員自治体に配布しました。

◇公民連携セミナーの開催

- ・令和4年1月17日と2月17日の2回に分けて、合計12社17サービスを紹介するセミナーを開催しました。

令和4年度公民連携セミナー開催予定

令和4年度も同様に、公民連携セミナーを開催します。今年度は、自治体と企業とのマッチングをより促進するために、次のような形態で2回の開催を予定しています。

①テーマ設定

- ・「防災」「高齢者」などのテーマや施策の方向性を設定して、関連するサービスを集めてセミナーを開催するとともに、今後のサービスの発展の可能性について意見交換をします。

②個別相談

- ・企業ごとに参加者と直接対話できるコーナーを設けて、連携イメージのすり合わせを行い、マッチングの精度を高めます。

市町村ゼミナール開催報告 (R3年度 第9講～R4年度 第2講)



市町村が直面する今日的課題をテーマに、専門家と先進自治体担当者を講師としてお招きする実践的セミナーです。地域問題研究所創設以来、約50年にわたり毎月開催しています。



第9講 公共施設の再生・長寿命化を図るリファイニング

リファイニング建築とは、建築家・青木茂先生により提唱された再生建築の手法です。約25年かけて発展させた独自の技術や実績5原則に集約されます。真庭市立中央図書館は、リファイニング前の面影を残しつつ長寿命化建築として、多世代・多様な人々が使いやすい動線を考えたデザインと空間を兼ね備えた地域の人々の憩いの居場所となっています。



青木茂建築工房 代表
青木 茂氏



真庭市建設部建築管轄 課長
川端 次男氏

第10講

自立・分散型エネルギーと脱炭素社会づくり ～世界の動向と日本の取り組み～



東京大学客員准教授・
国際環境経済研究所理事
松本 真由美氏



たんたんエナジー株式会社
代表取締役
木原 浩貴氏

松本氏は、家庭や企業・公的機関、地域のそれぞれの分散型エネルギーの活用について、藤沢市やトヨタの「Woven City」などの各地のスマートタウン等の取組み内容を交えながら、活用の進め方についてはお話されました。木原氏は、京都府福知山市で、市民協働型発電事業「たんたんエネジー株式会社」を設立して、公共施設向け電力販売、卒FIT電気買取など、エネルギー事業を通じた地域の魅力発信事業について紹介されました。



第11講

ウィズコロナ時代の公務員の 新たな働き方とダイバーシティ

今後の経済リスクとして、資金の逆流によって投資不適格社債が増えて、コロナ融資の返済に困り、自社株買いの停止、大量倒産の発生など、経済への影響があります。AI/IT化による物理的作業の自動化が期待されているが、単純作業は多様な物理的作業の塊なので省力化が困難であり限定的です。公務員のこれからの仕事は、頭で勝負する時代になっています。



大正大学表現学部表現文化学科 特命教授
海老原 嗣生氏



市町村ゼミナールの「これまで」と「これから」

市町村ゼミナールの今後の開催予定内容や、これまでの開催概要を、弊所ホームページ(<https://www.chimonken.or.jp/>)に掲載しております。ぜひ、ご覧ください。また各種講座企画もご相談ください。



第12講 まるごと実験都市ふくやまの挑戦

2016年の就任の際、「5つの挑戦」の実現を掲げられました。それは、福山駅周辺の再生加速とグローバル都市の創造、希望の子育てと寛容で健やかな社会の実現、人や企業が安心・安全に活躍できる都市環境の構築、新たな価値を創出する人材育成と個性光る地域振興、歴史・文化とスポーツによる新たな体験価値の創出です。



福山市長
枝広 直幹 氏

R4年度 第1講 官民共創による都市経営



元つくば市副市長
毛塚 幹人 氏

「小さな改革の積み重ねこそが行政の在り方を大きく前進させる」という思いを軸に、ゆるやかなつながりづくり、「自分事」として事業者や市民に考えて実行する士気を高める人材活用、地元の企業・大学・研究所などを巻き込む実証実験、他市からのベンチャーキャピタルなどの導入による関係企業・関係人口による活性化、「100日プラン」のスピーディな実行を進めてきました。



R4年度 第2講

SDGsのローカル指標のモニタリングとオープンガバナンス ～地域でのSDGsの実装に向けて、自治体はどう変わるか～

川久保氏は、ローカルSDGsの策定・実践方法とそのツールとなるローカル指標の重要性と事例、ローカルSDGs推進の支援ツールとして、川久保氏が構築されているローカルSDGsプラットフォームについてお話しされました。また、蒲郡市の杉浦氏は、総合計画に合わせて設定したSDGs独自指標の内容と開発した啓発ツール、蒲郡市がめざす「サーキュラーシティエコノミーについてお話しされました。



法政大学デザイン工学部建築学科
教授
川久保 俊 氏



蒲郡市役所企画部企画政策課
サーキュラーシティ推進室
杉浦 太律 氏

参加者の 『声』

【令和3年度 第8講】 SDGsを活かした地域づくり ～様々な主体による多様な活動の展開～

稲沢市市長公室 企画政策課 主任 大屋さん

元々ある地域資源を最大限に活かすための仕組み作りや組織体制の構築等、SDGsの目標達成への各団体の先進的な取り組みが大変参考になったとともに、SDGs推進には、行政と民間企業・NPO法人等との連携が不可欠であることを実感できました。

【第12講】 まるごと実験都市ふくやまの挑戦

豊田市 生涯活躍部 ラリーまちづくり推進担当
副参事 中神さん

年に一度、自治体の取組を首長から直接お聞きできる大変貴重な機会です。

今年は福山市さんの新型コロナ対策や都市魅力の創造などの4つのビジョン、また先進的な官民連携の取組について学ぶことができ、よい刺激になりました。

所員紹介

事業部長(主席研究員 兼務)

池田 哲也

特集テーマ「社会的処方」を学び、普段何気なく使っている「つながり」という言葉の持つ意味をじっくり考えなおす機会となりました。



研究理事 兼 首席研究員
(愛知県交流居住センター事務局長)

加藤 栄司

「地域に根差し、当事者目線で考える」、「参加と対話を重視し、実行・実践に視座を置く」、常に初心を忘れず取り組む所存です。



調査役

田辺 則人

ダブル、トリプルワークなど新しい働き方を模索しながら、身の丈に合わせた生活も心がけようと考えております。



研究員

林 桃子

釣り好きが高じて、認知症の方と一緒に釣りがテーマの活動を計画中です。最近では溪流釣りも始め、清流の国ぎふの魅力を再認識しています。



総務

新美 知征

5月より総務部で働くことになりました。所員が働きやすい職場づくりができるよう努めて参りますので、よろしくお願い致します。



理事長

青山 公三

最近、調査で飛び回っている職員達を見ていると、とても羨ましく思います。歳は取っても飽くなき探求心に駆り立てられています。



調査研究部長

河北 裕喜

「チャンスの神様は前髪しかない!」予め準備をしておく大切さを説くギリシャ神話の言葉ですが、最近の私は前髪すらつかめなくなりつつあります(汗)



首席研究員

春日 俊夫

「地域の人々が幸せになるために」「未来の地域がよくなるために」ということを肝に据えて、粉骨砕身、今年度もがんばります。



調査役

押谷 茂敏

「実家の片付け」のために月2〜3回の田舎通いを続けています。そのついでに田舎の地域おこしにも関わっていきたいと思います。



研究員

藤本 慎介

まちの「良いところ、楽しいところ」を引き出せるように、自らも楽しむことを忘れず仕事に励みます。よろしくお願いたします。



セミナー担当

出口 志穂

市町村ゼミナール・公民連携セミナーにご参加いただきありがとうございます。第50次、50年目も引き続きご参加ください。



理事兼総務部長(主席研究員 兼務)

藤 正三

山、海、まちをめぐりながら、人との出会い、関わりを大切にし、楽しく、元気に頑張ります。



研究理事

杉戸 厚吉

今年度も、地域問題研究所の業務と西尾市の政策専門員としてアドバイザー業務を兼務し、政策立案と実践の両面で関わっていきたいと思っています。



主任研究員

安間 奈巳

『楽しい』はステキな原動力だと改めて感じています。いろんな人と『楽しい』を通じてつながりを作っていきたいです。



研究員(5月より産休中)

鈴木 瞳

先日、第一子を出産しました。不寛容な世情が続く中、そんなことは知らんと、すやすやと眠る寝顔を見ながら、この子の未来、その先の社会に思いを巡らせています。



総務主任

石川 桂子

久々に総務部に新人職員が入所してきました。これからの仕事については、新しい発想で再構築してくれることを願っています。引き続きわたくし地間研で頑張ります。



嘱託研究員

西村 郁

特集「社会的処方とは」を担当しました。私自身も、日々、人とのつながりでエネルギーをもらっていると実感しています。



編集後記

今号のテーマ「社会的処方」の要となるのはリンクワーカーです。リンクワーカーとは、地域資源との橋渡しをする役割。ちもんけんは、社会的処方たる素敵な活動の情報をたくさん知っています。また、優秀なリンクワーカー的能力を持つ人が、地域や自治体にたくさんいることを知っています。これからみなさんに、「まちの宝」をお伝えします! (西村)

「明日の中部」改題 通巻208

ISSN 0918-7413

まちづくり情報誌 **ちもんけん Vol.113** 令和4年6月30日発行

編集 池田哲也・西村郁

発行 一般社団法人 地域問題研究所

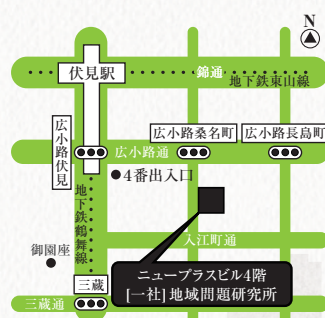
〒460-0008 名古屋市中区栄二丁目2番31号
ニュープラスビル4階

TEL : 052-232-0022

FAX : 052-232-0020

ホームページ: <https://www.chimonken.or.jp>

Eメール: office@chimonken.or.jp



地域問題研究所への交通
地下鉄「伏見」駅4番出入口より徒歩3分